巻頭言

農に勤しむ魂
文明が文明を滅ぼす時代において

小橋 暢之（協同総合研究所研究員）

岐阜県 小林武さんへ

お盆は過ぎ暦では秋になりましたが、こちら房総では太平洋高気圧が居座り、ギラギラの太陽が照りつける日々がまだ続いています。地域の田んぼはすっかり黄金色になり収穫も始まりました。田植えが５月半ば過ぎになった我が花信風舎の７枚の田んぼも稲穂が垂れて色づいてきました。今年も無事に収穫の秋を迎えられそうです。

さて、過日は山下 惣一さんと中島 正さんの往復書簡集『市民皆農～食と農のこれまで・これから～』（創森社）を贈っていただき有難う御座いました。この書は、小林さんの知己で農民作家として著名な山下惣一さんと、小林さんと同じ岐阜県におられる自然循環農法の提唱者、中島正さんの掛けあいによる渾身の一著であり、小林さんも読ませたい知己がたくさんおられたはずですが、私にもお分けくださりそのご厚意に感謝しています。

農業への回帰

この書は、グローバル資本主義の帰結として、やがて大失業時代・食糧難時代が必ず到来し、そのあとに「農業回帰」の時代が来ると確信するお二人が、「自立した農民」に不可欠な「農の魂」の在りようを語りかけています。序文で山下さんはこう書いています。

「TPPによってグローバリゼーションのゴールが見えてきた。それは規制ゼロの世界統一市場である。…（中略）つまり利益は集中、リスクは分散。公益の私益化、企業益化、あの『官から民へ』だ。私たちが共に支えあってきた年金、医療保険、教育、社会保障制度などの『公』はどんどん剥ぎ取られて『民』に移り、そのリスクはすべて自己責任となるだろう。

そして農業回帰、皆農の時代になる、と私は予測している。人が生きていくために必須の条件は、何よりもまず食べることだからである。自立した農民として生きることを目指す人たちには、どんな形態であれ不可欠なのが『農魂』である。私たちはそう考え、この往復書簡集を後世に遺すことにした」。

この書を読み進めていくうちお二人のあふれるばかりの農魂に圧倒されました。と

りわけ1920年生まれ、92歳になられる中島正さんの農に対する焼けるような熱い思い、山下惣一さんの強靭な「百姓自立」の精神には深い敬服の念を抱きました。お二人が予測するような「農業回帰」現象はすでに現れていますね。「国破れて山河あり」と言いますが、もう私たちのくには、あっちこっちが破れてボロボロになりつつあります。作家の五木寛之さんは「地獄の扉があいた」(『人間の覚悟』)とさえ書いています。さらに2011年３月の福島第１原発の爆発と最悪の炉心融解、放射性物質の拡散は、中島さんが言う「文明が文明を滅ぼす」ことを私たちの目の前で明らかにしました。こうした時代において、私たちはどう生きればよいのか、何を大切にして生きていくべきかを誰しもが問いかけられているのです。そして、その答えの糸口を自然や農業、あるいは貧しかったけれど幸福感のあった時代の価値などに求めようとするのは必然であるように私には思えます。

「百姓自立」

山下さんがご自分たちのことを「老農、百姓ジサマ」と呼んでおられるので、ここでは「百姓」という言葉を敬意をもって使わせていただきます。私は、中島さんと山下さんの農業人生を読ませていただきながら、「余は如何にして『百姓』になりしか」という言葉が浮かんできました。農業に就いたから即『百姓』になるのではなく、絶対的に自立する農の魂を得て「百姓」になっていくのですね。山下さんは「百姓の定義」についてこう語っています。「百姓」とは、「自分の食い扶持は自分で作り」、「命を人に任せず」、「カネに縛られず」、「他人の労働に寄生しない」で自由に生きる者だと。ここで最も肝心なことは、「自分の食い扶持は自分で作る」ということですね。昌益流に言えば、「不耕貪食」の自己否定であり、「正人の道」第一歩なのです。中島さんが言っているように、「自分の食い扶持」を作る農業は、そんなに難しいわけではありません。今、若者や失業者、あるいは定年期を迎えた都市のサラリーマンなどの農業への関心が高まっていますが、真のハードルは土地や資金ではなく、この「自分の食い扶持は自分で作る」(それゆえ、自分の命を他人に任せない)という生き方の覚悟が出来るかどうか、にあるのではないでしょうか。

「百姓５段階」

山下惣一さんが語っている松田喜一翁の教え「百姓５段階」論は、すごい指摘です。これを農学者が言うものならあまりにも観念的だと批判されるでしょうが、「農聖」といわれた松田喜一翁の言葉だからこそ傾聴したい凄味を感じます。この「百姓５段階」を山下さんのところから引用しますと次のようになっています(【　】内は私の表現です)。

第１段階　生活のための百姓…お金を得るだけが目的の百姓【銭百姓】

第２段階　芸術化の百姓…農に喜びと感動を有し作物・家畜に献身する【美的百姓】

第３段階　詩的情操化の百姓…自然と一体感を有している【自然真営的百姓】

第４段階　哲学化の百姓…天地の声、植物の声を聴く【真百姓】

第５段階　宗教化の百姓…神なる自然に寄り添う【聖百姓】

松田翁は、それぞれの段階を20姓とし、第５段階で漸く本物の百姓となる、と言われ農家の大半が第1段階の「生活のための百姓」にとどまっていることを嘆き、叱咤激励されたようですね。松田農場とその教えを受けた筋金入りの農家の方々が九州各地におられることは知っていましたが、山下惣一さんもその一人だということは初めて知りました。この百姓５段階論は、農の道がいかに深いかを教えてくれています。山下さんは、自分は第４段階には到達し、中島さんはもう第５段階を突き抜けているんじゃないかと語っていますが、お二人なら「さもありなん」と私は思います。

農の対価

松田翁の「百姓５段階」論は、農業が単に所得を得るための手段ではないことを教えています。おカネを稼ぐなら農業はむしろ不向きですね。かつて農業基本法が「農業で他産業並みの所得」を得ることを政策目標にしたことについて山下さんはこう言っています。「そのために限りなき規模拡大が求められ、そうなると農業は３Ｋ職場となり、仕事は労働に堕し、労働単価だけが価値となって百姓の強いところ、優れているところ、愉しみが消滅してしまう」。この半世紀、わが国農業は、いわば「儲かる農業」を目指してやってきたのです。今でも「輸出しろ」とかいって農家の尻を叩いているわけです。現実には農業は、「儲かる」どころか「食えない」ところまで追い詰められてきています。山下さんは、日本の歴史のなかで、農業が儲かった時代はなかったのではないかと指摘するとともに「そもそも第１次産業には、『儲け』が存在しない。私たちが農産物と引き換えに得るのは『対価』であって、けっして『儲け』でありません」と述べていますがとても大事な指摘だと思います。ですから山下さんは、農業をやりたい、と訪ねてくる最近の若者に対し、「半農半Xでも年金プラス農業、週末農業でも何でもかまわない。ただ、農業で儲けようなどとは考えるな」とアドバイスしているそうです。この山下さんのアドバイスをそのまま私は農業ワーカーズの皆さんにお伝えしなければなりません。「初めに儲けありき」では、農業の選択は悲惨なものになるでしょう。

小さな農

1920年生まれの中島さんが如何にして農業の道に入り、自然循環養鶏法にたどりつき、「小農こそ人間らしい生き方だ」と、確信するに至ったかが本書でよくわかります。それにしてもわずか３反ばかりの農地

を耕し、戦前戦後を通じ家族がちゃんと生活してきたことを驚愕する思いで読みました。水稲１反７畝とその裏作に麦やジャガイモをつくり、７畝の畑に野菜を育て「７人家族飢えることはありませんでした」という中島さんの暮らし方こそ、私たちが学ばねばならない点だと思います。中島さんは、必要な稼ぎ（現金収入を得ること）は土方をしたり薪を作って売ることでしのいでいたようです。それを「庭先でやれないか」ということで副業としての養鶏を始めたのでした。そしてその養鶏を実践するなかで、「自然卵養鶏法」という技術を確立していくのでした。この「自然卵養鶏法」は全国に広まり、今では数千人の養鶏家がいるとのことです。これらの自然卵養鶏法による養鶏農家の80％は脱サラ農家というのも驚きでした。そういえば、小林さんが南米旅行から帰国されて、岐阜の家への帰途、花信風舎に立ち寄ってくださいましたが、その時小林さんと一緒に来られた大松さんは確か自然循環養鶏家でしたね。中島さんの養鶏法は、鶏の生命を軸にする点においてヤマギシ式養鶏法と通じるところがあるような気がします。また、山岸巳代蔵が「一卵革命」を提唱し、中島さんが「みの虫革命」を提起しているのもなにか共通するものを感じます。中島さんは、失業者、フリーター、ワーキングプア、早期退職者などの方に「自給自立の足がかりに自然卵養鶏法を選択されてはどうか」とおっしゃっていますが私は大賛成です。以前、「鶏100羽運動」という庭先養鶏の卵自給運動がありましたが、庭先養鶏こそ農業としての養鶏の原点のような気がします。今や養鶏は大規模採卵業になってしまいました。小農こそ養鶏の原点に立ち返らせてくれる存在ではないか、と思います。

都市と農村、その新たな絆を求めて

さて、小林さん。最後に私の近況を報告させていただきます。

東京からこの房総の里山に移り住み、早や10年が経ちました。私は、「自食農」と称していますが、「自分の食い扶持」と親類・友人たちに食べてもらっている米づくりも今年で８回目の収穫を迎えます。松田翁の「百姓５段階」でいえば、まだ２段目の入り口くらいのところをウロウロしているような気がします。去年は集落の班長、今年は神社の氏子総代の役をおおせつかっています。いつまでも「新住民」しているわけにもいかなくなりました。ちょうど10年の節目に、私どもは小さな地域仕事を始めることにしたのです。この里山に包まれた地域は、房総では珍しい「過疎地域」に指定されています。私たちに出来ることは、東京から房総の里山に移り住んだ者として「都会と田舎」の懸け橋になることではないか、と考え首都圏からこちらに人を誘致しお世話する会社、「株式会社田園サポートセンター」を昨年立ち上げました。この会社の第一着手として始めたのが「田園カフェ」でこの５月半ばにオープンしました。カフェは、地域の人たちが気軽に憩えるオアシス

のような場所、そして町を訪れる人たちへの情報の提供所を目指しています。カフェのメインメニューは、我が女房殿が焼く米粉パン、それに長男君がつくるインドカレーと自家焙煎珈琲です。私の役割は、カフェ環境整備、庭づくり、カフェテラスショップ運営、販売･広告などです。まあ、一言でいえば「カフェのオヤジ」ですね。会社といっても雇用なし、営利を目指さない、対価でもってやっていくという小農経営そのものです。お客はだんだんリピーターが増えてきました。私どものお店のオープンと同時期に、近くに家具製造＆ギャラリーの店や美容院、足指マッサージなどの店もオープンしました。こうした人たちともお互いにチラシを置くなど連携しあってやっています。中島さんが言われますように､大都市の危機は深まっています。私たちは、首都圏の人たちにこの房総の里山に「疎開」したらどうですか、と提案していきます。「疎開先」での暮らし方は、まさに「自給自立」です。こうした提案と私たちの試みは、過疎市町村に指定された私たちの町にとってプラスになると考えています。大都市の危機が深まる一方､農村･田舎の危機はもっと深刻なのです。集落単位でいえば、高齢化率100％のムラがいくつもあるはずです。限界集落という言い方がけしからん、と言葉を変えてみても危機の深化が止まるわけではありません。都市と農村の交流、新たな絆づくりこそその二つの危機を乗り越えていく道ではないか、と思います。

小林さん、また房総方面にお越しの際には花信風舎と田園カフェにお立ち寄りください。この『市民皆農』について語りあおうではありませんか。（2012年８月25日）